

文化

文化の中央集権化  
一段と強まる傾向

西武美術館で開催されているパ  
リ・ビエンナーレ回顧展（26日ま  
で）に際し東京を訪れる機会を得  
たが、日本が海外にフランスの政  
治風味を抱き、今度の選挙の結  
果、政権はこう変わるのかなど  
といったこと多大の関心を寄せ  
ているのを知り、大いに驚くと同  
時にうれしくも思いました。

文といふわたくしの例を除いて、分断で申しあげますと、欄の左端の語の共同政府綱領に正確に文化についての一項があつますが、その原語自体は積極的の肝煎でできてゐる。そこで中間に触れておいて、ここはさきにもいふように、文化が重要であるという現況では、文化的な草は皆面になさるべきものがある。いつの時代にも、國家と民衆との間接的なものは常に「アクト」なものである。

多様化めざすとき

ジョルジュ・ブダイユ



啓蒙的だけでなく  
楽しませる創造を

てしまつたため、他の組織や団体は、はるかに悪い攻撃の的となつてお  
ります。危機があることは事実で  
あります。かくして一種の文化のす。

連化が起るものであります。そうした中で、たゞ一つバリ・ピエ・ドナレとかフェスティバル・ド・トゥヌ(秋の芸術祭)といふ組織だけが辛うじて文化の多様な、多様化を支えていたのであります。

こうした状況を一顧ひつかしくしているのは、世界的な藝術状況の要化であります。またそれ程遅れはなりません。この七十年前の文明の生活形態にはとてつけない古きよい表現形態への憧憬を企てるのであれば、それは阻止しなければなりません。この七十年前の

第三世界の芸術家  
にも表現の機会を  
しかし、そう言うことによつて、反近代主義者たちに道を与え、彼がもはやわれわれの時代

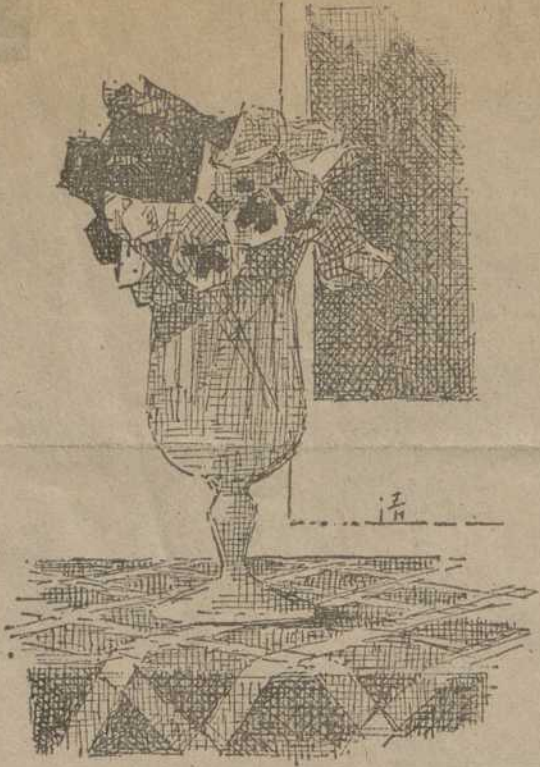
藝術・芸術家として政治



くない過去の一時期にはフランスの影響のもとに、ついでアメリカの影響のもとに、われわれは造形の芸術の国際化がおすすめられるのを見、やがてそれが画一化へとすすむのを見てきました。今日いわれる人体制化された「前衛芸術

第二世界の芸術家

しかし、そう言うことによつて、反近代主義者たちには言葉を与へ、彼らがもはやわれわれの時代の文明や生活形態にはそぐわない古くさい表現形態への復帰を企てるのであれば、それは阻止しなければなりません。この十年間新し



はる  
中村 清治

読 売 新 聞 東京  
YOMIURI SHIMBUN Tokyo

1978. 3. 23 夕刊

美術

## 文化ジャーナル

回顧の衝動が起きるのは終末を予感するからだ、というのは世事万般に共通する法則であるが、消長の激しい美術展の場合も例外ではない。七〇年の東京ビエンナーレ後、組織の活力を失った毎日現代展・国際展が時間かぎに回顧展を催したのもそうだったし、近いころでは、日本芸術見本市（JAF A）が似たような絵画展でお茶をにごしたばかりだった。この三月三日から二九日まで、東京・池袋、西武美術館で「時代の証言」パリ・ビエンナー

りと落としてしまった二〇年の歴史もともと、この回顧展は昨年の第一〇回ビエンナーレの併設展として、それとは別個に企画されたものである。同展の国際組織委員大勢の反対を押し切って強行されたことから分かるように、資金難の打開策としてフランスの官僚や一般民衆の自尊心をこそぐるに足る欧米の有名作家を、六七年の第五回展までの参加作品で浮き彫りにしようというものであった。記念すべき作品が揃っ

時代相が落ちた「時代の証言」展

レ59—73」と題する回顧展を開いているバリ・ビエナールなども、同じ運命の岐路に立たされているのだろうか。そう思わずにいられないほど、それはドラマチックな先端的芸術思考を追体験するにはほど適い、なにやらもの悲しげなオブジェの墓場の觀を呈していた。何かが死産してしまつたらしい。六〇点近い出品作品が悪いというよりも、それらを時代の証言として生かすに足る積極的回顧の姿勢が、会場に息づいていないのである。不用意な産婆がドット

ていたにもかかわらず、さんざんの不入りという結果に終わったのは、発想の狭量さがきらわれたからだろう。ボンビドー・センターの開放的活動を見てしまった今日のフランスの若者に、昔ながらのナシヨナリズムは通用しなかったのかもしい。

東京での回顧展は、バリ展とくらべるとはるかに出品作家の国籍の幅が広く、年代も新しい絵画運動を反映した七三年の第八回展まで繰り下がっている。「時代の証言」と呼ぶに



ふさわしい充実したものになるはずだった。五十余人の出品者には、日本人作家も五人まじっている。六〇年前後のヌーボー・レアリストを始め、イギリス彫刻の展開、アメリカのミニマル・アート、イタリアのルネ・ボヴヱラ、七〇年代の絵画運動など、その時代その時代の先端の動きが一応反映している。いや、反映しているはずであった。

（仏）  
1960年）

直す— そのような熱意と配慮がまったく欠けていた

たかを今日の視点から問い

しかし、会場がノッペリに見えたのはそのせいだけではあるまい。欠けた作品を写真によってでも補い、各作家の登場が何を意味してい

は致命的である。  
提示していた作家群が抜けているのは致命的である。

シズニー・カロが、後年の色彩抽象彫刻で代表されていたり、マックラッケン、ブラナガン、クネルスなど、六七年の第五回展で画期的な作品を提示していた作家群が抜けているのは致命的である。



だが、実際の会場に現出したのは、望遠レンズでのぞいた銀座通りさながら、遠近感のないノックベラした著名作家一覽表に過ぎず、「歴史」がスッポリ抜け落ちてしまっている。発表された当時のオリジナル作品に代えて、あまりに多くの新作が入り過ぎたせいもあり、輸送困難な作品が急に出品取りやめになつてしまつてもあった。たしかに、第一巻で「只愛彫刻」を出していたア

供するといふ最低の努力を怠つたやうに思えるのである。それを一層痛感したのは情報量の極端に乏しい同展のカタログだった。おぎなりの作家名鑑や各回コミッションナーの思い出話でお茶をにこす紙数があるなら、もっと国際的視野に立った年表づくりや特異現象の解説に力を尽くすべきではなかつたか。いつものことながら、産業が芸術の生きた姿をダメにしてしまふのである。(剣)

ASAHI JOURNAL (W) ㊦

78. 3. 31